

刑事の役目

1年4組 長町 和弥

「刑事の仕事はそれだけじゃない。事件によって心が傷つけられた人がいるのなら、その人だって被害者だ。そういう被害者を救う手だてを探しだすのも、刑事の役目です。」

新参者。この物語の探偵役、加賀恭一郎と被害者女性とともに、物語の舞台である日本橋に来たばかりの新参者なのだ。刑事という仕事について深い知識をもっているわけではない。だが、そんな自分でも、事件の解決にはその街や近隣のことをよく知っておかないと不利であることはわかる。だから、新参者の刑事が事件に臨むということに不安を感じていた。しかし、加賀はその心配を見事に裏切ってくれた。

加賀は、深い洞察力と、人を思いやりつつ鋭い所をつく話術とで、人間関係の絡まりを解きほぐし、意外な真相を突き止める。それは事件に直接関係のないことだったりする。だが、むしろ、それが直接事件とは関係ないと証明することで、別の問題を解決したりするのである。また、昔ながらの商店街をうまく捜査しながら、事件だけでなく、関係者一人一人と向き合う。そこには、加賀の人間らしさがよく表れている。

事件を解決に導くことができたのは、間違いなく加賀のおかげ。もしかすると、加賀が新参者であったからこそ解決に導くことができたといえるかもしれない。新参者だからこそ街や人の素の一面をのぞくことができたのではないか。きっとそうだろう。

加賀は、物語の中で幾人かの人と出会う。年齢、性別、家族構成など、けっして共通点はない。ただ一つの共通点。それは隠し事。どの人たちにも、人に言えない、言いたくないことがある。それがいつも後ろめたいものであるとは限らない。他人を思えばこそその嘘や隠し事だったりする。加賀は、それをあえて解明していく。その人や家族にしあわせと平和がもたらされるように、うまくやるのだ。

本来、その姿こそが刑事である。悪党を捕らえるだけが全てではない。刑事の仕事は、人々に平穏な毎日を与えることだ。だが、今の社会はどうだろう。大きな事件があれば、一家庭の小さな問題など、簡単に目をつぶる。この点は、変えて欲しい、いや、変えなければならない。ぜひ、加賀に会って、その姿を賞賛したいものだ。しかし、男は、その時、困ったように頭をかきながら白い歯を見せ、全てを悟ったような目で言うだろう。

「刑事の役目です。」

●書名：新参者 ●著者名：東野 圭吾 ●出版社：講談社

一生ぶんの恋

電気電子工学科2年 亀井 涼

僕たちの人生にはタイムリミットがある。誰にだっていつかは終わりが来て、大切な人と別れなければならない日が来る。その人生の中で人はどれだけの恋ができるのだろう。

この本の主人公の逞は心臓病で、医師が二十歳まで生きられないと話しているのを偶然聞いてしまう。そんな逞の初恋の相手、繭。二人は互いに惹かれあっていく。病気であることを除けば、それ以外は普通の高校生と同じでよく見られる光景である。心臓病であるがゆえに普通の恋人同士のように手をつないだり、抱きしめたり、キスしたり・・・を常に心臓のことを考えなければならない。もし僕なら、そのようなことに耐えられるだろうか。いや、耐えられない。僕は幸運なことに重い病気にかかったことがない。だから、重い病気の人の苦しみは分からない。むしろ、分かろうとしたり、分かったような気になるほうが傲慢だと思う。その痛みや苦しみはその人にしか分からないのだから。

人は、恋をする。誰でも生きていればごく自然なことだ。だが、自分の命が二十歳までと知ると人は愛しい人を最期まで愛しぬくことができるだろうか。この答えは人によって様々ある。しかし、愛しぬくことは本当の幸せなのだろうか。いや、むしろ苦しみである。なぜなら、生きている間は幸せだが別れ、つまり死ぬときは相手を残していかなければならない。自分は死んでしまうが、相手は深い悲しみを背負って生き続けなければならない。そのようなことを知っただけで、二人を引き寄せあうものは一体何なのか。それは、「決意」である。相手に何が起ころうと、相手を支え愛しぬくという強い決意で二人は結びついているのだ。二人は二人で一つの存在だから。

「恋をする」、その形は人によって違う。いわば、鏡のようなものだと僕は思う。鏡の前に立つ人によって鏡に映るものも変わる。同じように恋をする人の歩んできた道、出会ってきた人、そのすべてによって形作られる。人によって違いはあっても相手を全力で愛しぬくということだけは変わらない。その変わらないものを胸に抱きしめ僕は明日も歩み続ける。

●書名：僕の初恋をキミに捧ぐ ●著者名：橋口 いくよ ●出版社：小学館

奇跡

電気電子工学科3年 山上 祐美

季節や場所を問わず、私たちの身の周りで突然起こる小さな奇跡。それは、「出会い」である。その小さな奇跡は、私たちにたくさんの幸せと、どんな困難も乗り越えられる勇気を与えてくれる。そして、この本の主人公の元にも、雨の季節に小さな奇跡が起きる。

「またこの雨の季節になったら、2人がどんなふうに暮らしているのか、きっと確かめに戻ってくるから」。そういつてアークイブ星に旅立ってしまった澤が約束を守って、巧と佑司の元に帰ってくる。雨に季節に巧達に起こった奇跡。澤の記憶はリセットされているが、巧達は小さな奇跡から生まれた、たくさんの幸せを噛みしめながら、限られた時間を過ごしてゆく。

私も、高専に入学して、たくさんの友達や先生、先輩、後輩に出会った。特に、自分にとって大切な人との出会いは、本当に掛け替えのないものである。嬉しい時は一緒に喜んでくれて、落ち込んでいる時や不安な時は何も言わずに真剣に話を聞いて励ましてくれて、いつもすぐ隣にいてくれる。ただそれだけで、私は勇気付けられて、とても幸せな気持ちになれる。「出会い」がなければ、こんなに素敵な生活は送れないだろう。

しかし、「出会い」があれば「別れ」もある。この二つはいつも一緒にある。大切な人に出会い、同じ時間を一緒に過ごし、一緒にたくさんの思い出をつくる。そして、その思い出を胸に、互いにそれぞれの道を歩いていく。それは、長い長い時の中で、あっという間の出来事であり、まるで、春に咲きほころぶ桜のように、美しく、儂いものである。

この小さくて素敵な奇跡は、一度だけの出来事ではない。何度も何度も起こる小さな奇跡だから、その奇跡になかなか気が付くことができない。大切な人に出会い、大切な人と一緒に、掛け替えのない大切な時間を過ごす。これこそが本当の幸せであり、何よりの奇跡なのである。

●書名：いま、会いにゆきます ●著者名：市川 拓司 ●出版社：小学館

